

悪霊 第四部・荒れ野の花

悪
霊

第
四
部
・
荒
れ
野
の
花

【登場人物】

- 伊集院満枝……………H市の地主の娘
 猪俣佐和子……………満枝の元クラスメイト。東京で左翼活動に従事。党員となる
 増田小百合……………旧姓・安西。伊集院満枝の一年後輩
 佳代……………貧しい農家の娘。党のハウスキーパー
 喜代美……………女工。党に派遣されモスクワに留学
 李麗姫……………女性抗日バルチザン
 小沼健吾……………労働運動家。伊集院家の元小作人
 三沢……………党中央委員
 村野栄太郎……………党員。マルクス主義研究者
 大橋多喜蔵……………党員。プロレタリア作家
 増田喬……………小百合の夫
 磯田アヤノ……………小百合の叔母
 磯田幸吉……………アヤノの夫。学校教師
 悦子……………アヤノの生徒。東京に家出する
 加藤寅二郎……………磯田幸吉の元教え子。脚本家
 石原中佐……………関東軍参謀

昭和六年（一九三二）年一月～十一月。モスクワ、間島、東京市、満州大連、弘前市

V

「わが空軍、錦州を爆撃す」

関東軍の快速進撃を報じる新聞に、安西小百合……否、今は結婚して増田姓となった小百合は、ため息をついた。

満州事変が始まってから一ヶ月が過ぎようとしていた。いまだ戦火はおさまらず、結婚まもなく満州に出張した夫の喬は、帰ってこない。

数日前、夫から送ってきた手紙には、事変が始まって大連市内の治安は維持されていること、川奈産業が軍需物資の調達で莫大な利益をあげていること、増田自身も仕事が多忙でしばらくは帰国できそうにないこと等がつづられていた。

小百合の不安をかきたてたのは、夫が書いた、次のような一節だった。

伊集院満枝さんの指示で、関東軍中枢の某将校と親しくなった。おかげで軍事行動に関する情報が入りやすくなり、それに基づいた事業展開ができるようになった……。

伊集院満枝。

その五文字が、眼に焼き付いて離れない。その夜、小百合は夢を見た。女学生姿の伊集院満枝が、全裸の夫と向かい合っていた。満枝の手が、夫の股間に伸びる。夫は全身を痙攣させながら、苦痛に耐えていた。小百合はそのすぐそばで見ているながら、声も出さず、からだも動かさず、何をすることもできない。やがて睾丸を破裂させられ失神した夫のからだに、満枝は笑みを浮かべなが

ら齧りつき、食べてしまうのだ……。

夫の満州行き以来、小百合は青森の弘前市に住んでいる叔母の磯田アヤノの家に泊まっている。明るく陽気なアヤノと、優しいその夫・幸吉を、小百合は子どもの頃から慕い、夏休みは彼らと過ごすことが多かった。

華道の師範をしているアヤノは、市内の生徒の家に招かれており、高等小学校の教師をしているその夫は学校に出ている。小百合は、独り留守番であった。

気持ちよく晴れた朝だった。縁側に出て新聞を読んでいると、小さいがこざいかな庭に、暖かな陽だまりができていた。心地よいけだるさとともに、からだの奥から不思議な疼き^{うず}がこみ上げってくる。

知らず知らず、小百合の右の手が、和服の裾から股間へと這っていった。

自慰を覚えたのは、増田喬が満州に行つてからだ。初めて夫と床をともした夜、想像していたような痛みは少なく、二度目の交わりにして、小百合はその歓びを覚えた。自分でもたじろぐほどの快感だった。普段のおとなしさとは裏腹に、激しく身悶えし、求めてくる小百合に、夫は戸惑いを隠さなかった。

それだけに、夫と離れて暮らすのは辛かった。一緒に満州に行けばよかった。その後悔したこともあった。伊集院満枝の近くで暮らすのは、考えるだけでも恐ろしかったのだが、今は、少し違う。

伊集院満枝は、夫に何をしようとしているのか。

満枝が、夫を川奈産業に入社させたのは、小百合と婚約していることを知っていたからだ。入

社させただけではなく、わざわざ満州まで呼び寄せた。

何か企んでいないわけがない。でも、自分は何もできない。満枝が、何人もの男性を去勢し、また、猪俣佐和子をそそのかして自分の婚約者を殺害させたような恐ろしい女だと、夫に打ち明けるわけにはいかなかった。

早く、帰ってきて……。

眼を閉じ、自らの陰部を指でまさぐりながら、小百合は、ラグビーで鍛えた夫のたくましい四肢や、そそりたつ男根を思い浮かべていた。半ば開いた唇から吐息が漏れた。

やがて指の動きは激しさをまし、小百合は身をくねらせて、からだのなかで渦巻く快感を味わっていた。

その日の午後。

「ただいまあ」

玄関がざわめき、磯田アヤノのにぎやかな声が響いた。続いて、やかましくさえずる子どもたちの声。

「おかえりなさい」

玄関に出迎えにゆくと、外出着姿のアヤノの後ろに、薄汚れた小学校の制服を着た女の子が三人、立っていた。

「あら、いらっしやい」

子どものできないアヤノは、近所の貧しい家の女の子たちに、無料でお華を教えていた。二人

の女の子が、ごめんください、と頭を下げた。すでに小百合とも顔見知りである。ただ一人、見覚えのない背の高い色黒の女の子だけは、小百合から眼を逸らし、軽く頭を動かしただけで突っ立っている。

「さ、あがんなア、お稽古前にお台所で手を洗うんだよ、いいね」

女の子たちを促して上がらせた後、アヤノは小百合に言った。

「お稽古が終わったらあの子たちにあげたいから、適当なお菓子を見繕ってくれないかい」
はい、と頷き、小百合は買い物に出た。

近所の和菓子屋で大福を買い、戻ってくると、あの色黒の少女がただ独り、玄闕の上がりかまちにぼつんと腰をおろしている。

「どうしたの？」

声をかけたが返事をしない。小百合は横に並んで座った。

「お稽古しないの？」

「だって、つまんねーもん」

少女はふてくされたように言った。低い、男の子のような声だった。

「でも、お華のお稽古のために来たんでしょ」

「違うよ……お菓子が出るって聞いたから」

不良少女のようなならしなない姿勢で両脚を無作法に伸ばし、大人びたふうに振る舞う彼女の、お菓子目当てという子どもっぽい言い分に、小百合は思わず吹きだした。

「なにがおかしいの？」

少女はむきになって抗議した。

「ごめんごめん。とにかく、お稽古に戻りなさいよ。ちゃんと大福、買ってきたから楽しみにしておいて」

大福、と聞いて少女は眼を輝かせたが、すぐに用心深そうな野良猫の面差しに戻り、ぼそつと言った。

「やだ」

「じゃ、大福、あげない」

「じゃ、要らない」

少女は立ち上がり、ぱつと駆け出した。慌てて小百合は後を追ったが、少女は逃げ足が速く、すぐに見失った。

他の子どもたちが帰った後、大福をお茶請けにくつろぎながら、小百合は、逃げてしまった少女のことをアヤノに謝った。

「ああ、悦ちゃんね。気にしなくていいよ、ああいう子だから」

アヤノは笑顔で言った。

「悦ちゃんって言うんですか？」

「ああ、悦子って名前なんだけどね、なかなかおま、せな、おもしろい子だよ」

それから、小百合は近所でちよくちよく、悦子を見かけるようになった。親分肌なのだろうか、たいてい、年下らしい男の子や女の子を引き連れている。小百合のほうから挨拶しても眼を逸らすばかりだったが、ある時、珍しく独りで地面に石で絵を描いているところに出くわした。

「悦っちゃん」

そう声をかけると、顔を上げて、「なんで名前、知ってるの？」と訊ねてきた。アヤノさんに教わったのよ、と答えると、ふうん、とお絵かきに戻る。描いていたのは、口ひげをはやした男性の顔だった。

「なあに、これ」

「コールマン」

「コールマン……ああ、ロナルド・コールマン？」

「ええー！」

悦子はとたんに顔を輝かせ、小百合のほうに向き直った。

「コールマン、知ってるの？」

「知ってるわよ、そのくらい」

うってかわった悦子の態度に、小百合は笑いながら言った。

「ハリウッドの二枚目でしょ？ 悦っちゃん、活動写真なんて見るのね」

「見ないよ」

「そう？」

「映画館でポスター見たんだよ」

映画館のある盛り場までは遠い。小学生が独りで行けるような場所ではない。小百合は訊ねた。

「歩いていったの？」

「うん」

「独りで？」

「友だちと」

「学校の？」

「ううん。三郎と」

「三郎？」

「近所のお兄ちゃん。あたし、もう行くね」

ぱっと駆け出した悦子のスカートの裾が風でめくれ、健康そうな太ももが覗いた。

その夜、夕食の席で、小百合は悦子とのやりとりを紹介した。

「三郎とねえ……」

アヤノの夫・磯田幸吉は箸をとめ、なにやら考え込んだ。

「どうしたの？」

「いやね」

妻の問いに、磯田は言った。

「六年ほど前に小学校を卒業した生徒に、井原三郎って子がいてね。今じゃ家を飛び出して、盛り場をうろついていると聞いた。まさか、そいつじゃなければいいが……」

「まさか……悦ちゃん、まだ十二歳のはずだよ」

アヤノは笑った。小百合は、浅黒く鼻も低い、眼の大きな悦子の顔を思い浮かべた。十二歳という年齢にしては背が高く、胸の膨らみも目立つ。もの言いや仕草は幼いが、それでもどこか妙に大人びた雰囲気がある。

翌日、悦子は小百合を見かけると、笑顔で駆け寄ってきた。用心深そうでいて、いったん心を開くと無邪気に人なつこくなる娘だった。たわいなしなおしゃべりのなかで浮かんできたのは、悦子の不幸な境遇だった。父親は男やもめの畳職人で、子どもは悦子独り。酒びたりで生活は貧しいらしい。

夕食の時間だから帰るわね、と言うとひどく寂しそうな面差しで、これから何して遊ぼうかなアとつぶやいた。おうちに帰らないの？ と訊ねると、「やだ」と言う。不審に思っただけだ。悦子は小百合は、悦子の答えに衝撃を受けた。

「家にいると、父ちゃんがおっぱい触ろうとするんだもの」

十二歳の我が娘のからだを触る父親……。啞然とする小百合に、悦子は続けた。

ここ数日、そんなことが続いている。家に帰るのがいやで、盛り場まで歩いた。そこで声をかけてきたのが三郎だった。

「かっこいい人だよ」

悦子は、陶然とした眼つきで言った。遅くまで三郎やその仲間と盛り場で過ごし、父親が寝入ったあたりを見計らって帰るのだそうだ。

「優しいし、親切だし。今から行こうかな……」

小百合は、だめよ、と引きとめ、だったら、うちでご飯食べていけば？ と誘った。悦子は眼を輝かせて、うなずいた。

磯田夫婦は快く悦子を迎え入れた。にぎやかな夕食を終え、カルタ遊びに興じた後、幸吉が悦子を家まで送っていった。

その間、小百合から事情を聞いたアヤノはため息をついた。なんとかならないのでしょうか、と小百合は訴えたが、よそ様の子だからねえ……。と首を振るばかりだった。

その三日後。

お昼の買い物を終えた小百合は、家の近くの小さな公園のベンチに座っている悦子を見かけた。俯いたまま、足の先で砂地に絵を描いている。よく連れ歩いている小さな子どもたちが、悦子から距離を置いて遠巻きに様子を窺っている。

「どうしたの？」

声をかけると、なんでもない、と以前の頑なな面差しを崩さなかった。どうしたのよ、と肩を揺すぶったが、うるさそうに顔を背ける。

「あのね」

鼻をたらしした男の子が言った。

「悦ちゃん、遠くに行っちゃうんだって」

「善太！」

悦子が鋭く咎めた。

「余計なこと、言わないの！」

「行くって、どこへ？」

小百合は訊ねた。悦子はしばらく黙っていたが、やがてぽつりと「東京」と答えた。

「東京？」

「うん」

「なぜ？」

「三郎が……東京に行っちゃったから」

切れ切れに語る悦子の言葉を繋ぎ合わせると、どうやら、悦子の盛り場仲間の三郎は、市内に縄張りを持つ一家の与太者と大喧嘩をして、弘前に居られなくなったらしい。それで、東京で働いている姉を頼って出奔したのだという。

「じゃあ、三郎さんのところに行くの？」

小百合の問いに、悦子は小さく頷いた。

「でも……その場所を知っているの？」

「浅草の、ダリヤってお店だって言ってた」

「でも、そのお店をどうやって見つけるの？ だいたい、子どもが独りで東京に行くなんて危なすぎるわ。人さらいや、悪い人だって大勢いるのよ」

「大丈夫だよ」

悦子は口を尖らせた。

「あたい、喧嘩はすごく強いんだ。男の子にだって負けたことないんだよ」

「相手は大人よ」

「平気だい。この間だって、盛り場で中学生を泣かしてやったんだもの。男なんて、きんたまを蹴ってやれば、やっつけられるんだもの」

きんたまを……。小百合の脳裡に、山の中で白痴の股間を蹴って気絶させた挙げ句、去勢した伊集院満枝の白い笑顔が浮かび上がった。

「だめよ！」

小百合は思わず叫ぶように言った。

「絶対にだめ！ 許しません！」

「なんでよ！」

悦子は噛みつきそうな顔で喰ってかかった。

「あたいに、ずっとここにいろって言うの？」

その眼に涙が溜まっている。小百合はたじろぎ、言葉を失った。

「お姉ちゃん、大嫌い！」

悦子は小百合を突き飛ばし、走り出した。二、三步よろめいた小百合が、やっと姿勢を立て直した時、悦子の姿は見えなくなっていた。

「あのね」

呆然としている小百合に、女の子が寄ってきた。

「悦っちゃんのお父ちゃん、悦っちゃんのほほに触るようになったんだった」

ほぼ、という言葉が、陰部を示す言葉だと気づいた時、小百合はやるせない思いに包まれた。

それから三日後。

悦子の行方はわからなかった。磯田幸吉は、悦子の家を訪ねたり、盛り場で三郎の仲間たちを探し出して聞いたりしたが、誰も悦子の姿を見ていないという。

「ひどい父親だね」

夕食の席で、幸吉は憤慨した。

「警察に届けるべきだと言ったんだが、面倒なことになるからいやだ、の一点張りだ。独り娘が帰ってこなくても心配するどころか、さっそくいかかわしい女を家に引っ張りこんでる。度し難い男だよ、まったく」

「でも、困ったねえ」

アヤノは心配そうに言った。

「ほんとうに東京に行っちゃったのかしら」

「あの……わたくし」

小百合は意を決して言った。

「東京に行きます」

幸吉とアヤノは驚いて小百合を見た。小百合は続けた。

「浅草のグリヤというお店さえ見つければ、なんとかなるかもしれません」

「でも、小百合ちゃん……」

アヤノは言った。

「あなた、東京に行ったことはあるの？」

「ありません。でも……」

小百合は眼を潤ませて言い募った。

「わたくし、後悔しているんです。悦ちゃんの身の上を知っていないながら、わたくしは何もしなかった。東京に行く悦ちゃんが言ったとき、わたくしはつい、きつい言葉で叱ってしまったんで

す。もっと彼女の身になって接していれば、こんなことにはならずすんだかもしれないじゃないですか」

「それはそうだけど……」

「悦ちゃんに何かあったら、わたくしのせいなんです。そんなのいやです。行かせてください」

アヤノと幸吉はしきりと止めたが、小百合は譲らなかつた。とうとう、夫妻は折れた。

とはいえ、女学校を出たばかりの小百合に、独りで東京に行かせるわけにはいかない。ちよつと待っていてくれ、と幸吉は自室に消え、やがて一枚のはがきを持って戻ってきた。

年賀状だった。差出人は、東京市下谷区在住の加藤寅次郎とある。元旦の挨拶のそばに、パイプをくわえ鼻ひげをたくわえたタコの漫画が添えられていた。

「彼も昔の教え子でね、浅草の劇場で台本を書いている面白い男だ。ひとつ、案内を頼んでみよう」

小百合が東京へと発ったのは、その五日後である。

「浅草は、東京の心臓というくらいだね」

音と光、そして人の洪水のただなかにいるようだった。

極彩色のネオンサイン、やかましく響いてくる蓄音機の音楽、派手に飾り立てた男女が忙しく行き交い、都会の雑踏に慣れぬ小百合は、幾度も人とぶつかり、その度に頭を下げて謝り、かえって邪魔扱いされつづけた。

浅草に詳しい加藤寅次郎の案内なしには、一步も動けなかつたに違いない。

「浅草にはあらゆるものが生のままほうり出されている。人間のいろんな欲望が、裸のまま踊っている。あらゆる階級、人種をごった混ぜにした大きな流れ、明けても暮れても果てしない流れである。浅草は生きている……」

巧みに人混みを避けて歩きながら、加藤は続けた。

「こりゃ、添田啞蟬坊という演歌師の言葉だけどね。まさにそのとおり。ここに来れば東京の全てがあるんだ」

加藤は、三十歳を少し過ぎた、おしゃれな好男子だった。最近旗揚げしたレビュー団のために台本を書いているが、レビュー団の花形ダンサーである妻に食べさせてもらっているのが現実だとおどけて自嘲した。

「ほら、あれが妻が働いている劇場だよ」

加藤の指さす先に、竜宮城を模した派手な入り口の水族館があった。その二階が、彼が台本を提供しているレビュー団のステージになっているのだ。

その日の朝、小百合は夜行で上野駅に着いた。出迎えてくれた加藤の家で一休みし、夕方、さつそく浅草に繰り出した。

加藤は、磯田幸吉から依頼の手紙を受け取ってすぐ、ダリヤという店を探し当ててくれた。残念ながら、井原三郎の姉は半年前に辞めてしまい、どこへ行ったのか分からないようだ。井原三郎が訪ねてきた形跡もない。ただ、十二歳か十三歳くらいの女の子が店に来たことがあるという。ともかく、店で詳しく話を聞けば、悦子の居場所を捜す手がかりが見つかるかもしれない。

ダリヤは、映画館や劇場が建ち並ぶ浅草六区の奥まったところにあった。飾り窓のガラスに、

花びらがあしらってある。ドアを開けると、いらっしやいませ！ と、和服に桃色のエプロンをつけた女給たちの黄色い声が出迎えた。

「よう」

加藤は、いかにも場慣れしているらしく、軽く手をあげた。その後から、強張った面持ちの小百合が、加藤の背に隠れるようにしてぎこちなく入る。加藤はボーイを呼び寄せ、訊ねた。

「浜子さん、いるかね？」

「どちら様でしょうか」

「加藤と言えば、分かるよ」

ボーイは不審顔で店の奥に去り、加藤は空いているテーブルに腰を下ろし、突っ立ったままの小百合を促して座らせた。

やがて、浜子という女給がやってきた。年は小百合と同じくらいか。断髪で、匂ってくるほど化粧が濃い。加藤を見るなり、思い出したように言った。

「あ、昨日の……」

「よく覚えていたね」

加藤は、小百合を紹介し、この人が、例の女の子を捜しに上京してきたんだ、と告げた。

「それは、ご心配ねえ……でも、あたし、その子の居場所までは知らないですよ」

浜子の言葉に、小百合は身を乗り出して言った。

「ともかく……その時の様子だけでも、お話ししていただけませんか？」

「そうねえ……」

浜子は首を傾げ、しばらく天井を見つめていたが、「とにかく、汚いかっこうしてるから、乞食でも入ってきたのかと思ったんですよ。追い払おうとしたら、強情な子どもでね、梃子でも動かなさそうだから話を聞いてやったら、井原さんとかいう人のお姉さんはいないかって言うんです。あたしは三ヶ月前にここに来たばかりなのでボーイさんに聞いたたら、半年前にやめちゃって、居場所も分からないと言われて。するとその子、わかりましたって行っちゃったんですよ」

「それだけですか？」

「ええ……家出した子だつて分かっていたら、もうちょっと引き留めたかもしれませんけれど、何も言いませんでしたからねえ」

小百合は失望してうなだれた。まるで手がかりなしではないか。

東京に来ればなんとかなる。その思いこみは甘かった。浅草だけで、どのくらいの店があつて、どれだけ多くの人が蠢いているか。そのなから悦子を捜し出すのは、至難の業と思えた。

さすがに同情したのか、浜子はこう言ってくれた。

「スワンってカフェに行ってみれば？」

「おお、仲見世の入り口にある、あの店か」

加藤が口を挟み、浜子は頷いた。

「そこに、直美なおみって女給がいるんですよ」

なおみ……。アメリカ人のような名前だ、と小百合は思ったが、加藤は、お聞いたことがある、「痴人の愛」だろ？ と言った。谷崎潤一郎の小説に出てくるヒロインからとった源氏名ら

しい。

「直美さんは、浅草は長いし、顔も広い。与太者や不良少女とも付き合いがあるっていうから、何か知ってるかもしれませんよ」

ダリヤを出た早百合と加藤は、さっそくスワンという店に向かった。

流行っている店らしく、ドアを開けると、とたんに煙草の煙と、アルコールや香水の匂いが、鼻孔に飛び込んできた。

満員の客や女給の聲がやかましく響く中、加藤はボーイを呼んだ。

「直美さんって娘むすめはいるかね？」

「今、お客さんに着いてるんですよ。他の娘じゃだめですかね？」

「じゃあ、待つよ。ぜひ、直美さんにお願かたがねいしたいんだ」

ボーイは洪々承知して、恰幅かたがねの酔い紳士二人連れを相手していた女給に歩み寄り、耳打ちした。年は二十台の後半だろうか、眼の大きい艶やかな面差しあでの直美という女給は、ちらりと小百合たちを一瞥し、頷いたが、席を立とうとはしない。ボーイが戻ってきて、しばらくかかりますけれど、いいですか？ と念を押した。加藤は頷き、空いているテーブルに座った。

席に着いてから、加藤はビール、小百合はソーダ水を頼んだ。隣の席で、顔を真っ赤にした男たちが、下卑た笑いを響かせる。やまかしく響く蓄音機のジャズの音。小百合は目眩めまいを覚えた。

「すみません」

急に立ち上がった小百合に、加藤が心配そうに、どうかしたの？ と声をかける。いえ、ちょ

つとご不浄に、と告げ、小百合は席を離れた。

忙しく行き来する女給やボーイとぶつかりそうになるのを避けながら、手洗いのドアに辿り着き、なにげなく振り返って小百合は棒立ちになった。

すぐそばのテーブルに、若い紳士が女給と並んで座っていた。断髪にし、濃い化粧を施していたが、その女給はまざれもなく、猪俣いのまたさわ佐和子こだった。

猪俣さん……。

小百合は呆然と、佐和子を見つめた。

なぜ、こんなところに。

(第四部・了)